（管理規則第３条実施要領　別紙様式）

２０２５年度（令和　７　年度）学校評価自己評価表

城北中学校区	校番５６	福山市立久松台小学校
	最終更新日	2026年（令和８年）２月９日

Ⅰ　福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、 日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

Ⅱ　中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容

学校関係者評価報告書は全項目「十分満足できる」と評価された。中学校校区で連携を深め、共通の取組で成果をあげている。各校の目標が達成できていないものについては取組の進捗状況を細かく把握し課題克服に向けて PDCA サイクルに則り実践する。

児童生徒の現状

全国学力調査の結果、福山市の平均正答率を上回ることができたものの、正答率４０％未満の生徒の割合は少なくない。また、不登校児童生徒も少なからずいる。

育成する力 資質・能力	主体的に判断する力・課題を発見し解決する力・地域社会と協働して貢献する力
めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	・自ら考え、主体的に判断し、自律した行動ができる児童生徒 ・豊かな心を持ち、お互いを尊重し、人を大切にする児童生徒
中学校区として 統一した取組等	・CS をベースにした校区合同研修と合意形成を意識した授業研究及び教科等部会の取組 ・DC 教育を基に、ＩＣＴを活用した個別最適化した授業実践及び協議・交流の取組 ・家庭での効率的な学習計画の立て方・メディアとの付き合い方への取組 ・地域と協働した合同行事や乗り入れ授業、「総合的な学習の時間」交流会の取組

Ⅲ　自　校

ミッション

未来を切り拓く「生きる力」を育成する
「すべては子どもたちのために」を基底に据え、学校・保護者・地域が連携し、「この学校へ来てよかった」「この学校へ来させてよかった」といわれる学校に

学校教育目標

自ら考え　正しく判断し　行動する　感性豊かな子

育成する力 資質・能力	主体的に判断する力 主	課題を発見し解決する力 課	地域社会と協働して貢献する力 地
めざす子ども像	自分の考えや経験を基に主体的に判断し、自己決定したり、じっくり内省したりして、自律に向かうことができる。	身の回りから課題を見つけ、自分で考えたり他者と協働したりして解決しようとしている。	地域のよさや課題に目を向け、自分にできることを考え実践している。

現　状

＜テストで測れる学力＞（全国学力・学習状況調査等の結果より）
【〇成果　●課題】
〇全国学力・学習状況調査の「国語・算数」では全国平均・県平均を上回り、基礎的・基本的な学力はおおむね定着している。また、無回答率が低かった。
〇授業づくりで、PDCA サイクルを意識した指導をすることで、児童の主体性を伸ばすことができた。
●国語科で、提示された全ての条件を満たして書く力が弱い。また、主語と述語の関係を捉える力が弱い。
●算数科で、二次元の表など、多くの情報の中から必要な情報を見つけ出す力が弱い。
＜非認知能力＞（２０２４年度に職員で分析した児童の実態より）
【〇自律に向かっている姿　●自律から遠ざかっている姿】
〇自己選択し、それを実行する力が伸びている。
〇振り返りから次の目標設定につなげることができてきている。
●自己の伸びや課題についてのメタ認知や、それをする習慣や、メタ認知のための語彙などが育っていない。

研究	テーマ	対話と書くことを通して、自己の変容を自覚できる学びの創造 ～国語科・外国語科の授業展開の工夫を通して～
	内容等	【自己の変容を自覚できる４つの柱】 ① 学びの質を高める話し方・聞き方導入 ② 外国語科・外国語活動におけるモデル授業の展開 ③ 国語科における対話型授業の展開 ④ 自己表現（自己の認識と変容を自覚）できる振り返り
めざす授業の姿		対話と書くことを通して、自己の変容を自覚できる授業 主 児童が自己決定したり、じっくり内省したりする授業 教師が、児童の実態から的確なファシリテートをする授業 課 課題に対して自己決定や自己選択することができ、児童が進んで挑戦できる授業 地 受容的な対話や協働的な課題解決を通して、新たな気付きが得られ、自己の変容を自覚できる授業

Ⅳ　目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立久松台小学校

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価（10月1日）				最終評価（２月末）				
							□指標に係る取組状況	ﾌﾟﾛｾｽ評価	達成評価	改善方策	□指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	ﾌﾟﾛｾｽ評価	達成評価	総合評価	改善方策
４	自ら考え学ぶ児童（主体性）の育成	★	新規	対話と書くことを通して、自己の変容を自覚し、そこから前向きに学びを見出す、自律した児童を育成するとともに、確かな学力を定着させる。	学びの質を高める話し方・聞き方を導入し、対話型の授業を展開する。 自己の認識と変容を自覚できる振り返りを行う。 児童のつまずきを把握し、基礎学力を定着させる。	「友達の意見を聞いて新たな考えをもったり、自分の考えを見つめ直したりしている。」と答える児童の割合を、各学級８０％以上にする。 「帯タイムを活用して児童のつまずきを補充する」を１００％実施する。	□アンケート項目に肯定的に答える児童は84.8%だった。昨年度からの振り返りモデルをもとに、自己を振り返り、自己の変容に気付いている児童が増えてきている。 低学年では、「対話」の定義を、中学年では、「対話を深める」の定義を児童とともに考え、共通理解を図った。 高学年では、「対話のモデル」の視聴を通して、自己変容に大切なポイントを児童とともに考え、共通理解を図った。 特別支援学級では、朝のスピーチで、自己の変容を価値付けたり、質問をしたりした。 □全学級が、帯タイムを用いて児童のつまずきを補充することで、学力向上を図った。	４	４	２学期以降は、自己変容の３ステップを設けることで、視点を明確にし、児童に目標を設定させたり、振り返りを通して自己の変容を自覚させたりしていく。また、教師が児童の変容を価値付ける声かけをしていく。対話のモデルを作成し、児童に提示することで、全校で系統性を持った指導を行っていく。	□アンケート項目に肯定的に答える児童は91.3%だった。2学期以降は自己変容の３ステップを設け、視点を明確にして目標を設定したり、振り返りを通して自己の変容を自覚させたりした。また、教師同士で対話のモデルを作成し、児童に提示することで、全校で系統性を持った指導を行った。 □児童のつまずきを把握し、帯タイムを活用して補充することは、全学級で達成できた。 ◎自己変容の３ステップを設けたり、対話のモデルを提示したりすることで自己の変容を自覚し、そこから前向きに学びを見出す児童が増えてきた。	４	４	４	引き続き、振り返りや対話のモデルを活用していく。また、次年度に向けて、これまでの研究で培った「自己選択・自己決定」、「振り返りからの目標設定」、「対話と書くことを通して、自己の変容を自覚する」を生かして、スパイラルに学べる研究テーマを設定することで、自ら考え学ぶ児童を育成していく。

			継続	自分の良さに気付き、自信をもって物事に挑戦できるとともに、思いやりをもって相手と関わることができる児童を育成する。	自分や友達の良さに気付き、伝え合う取組を行う。週に１回の「なかまタイム」、たてわり掃除等を実施し、他者（児童も教職員も）と関わる場を設定する。教職員間で学級経営について分析・交流し合う研修を実施する。	「自分には、よいところがある」と肯定的に答える児童を８５%以上にする。	□アンケート項目に肯定的に答える児童は93.5%だった。週に１回の「なかまタイム」では、各担任がクラスの実態を分析し、それに基づいて内容を考え、計画・実践した。また、学級経営について考える教職員向けの通信の発行や、隔月１回職員全体で学級経営研修を行うことで、取組の分析や実践交流をする時間を確保した。	４	４	夏季休業中に各教職員が児童の自己肯定感を向上させるための研究テーマを設定した。2学期以降はその研究テーマに基づいた取組を行い、振り返りをしながら改善したり、継続的に実践したりしていく。また、肯定的評価という一括りで捉えるのではなく、個々や学級全体の伸びにも目を向けながら取り組む。	□アンケート項目に肯定的に答える児童は90.9%だった。(最高評価 12.9%増。最低評価 1.3%減。) 夏季休業中に各教職員が研究テーマを決め、２・３学期と継続して取り組んだ。冬季休業中に各教職員が実践した取組を交流し合うことで、新たな視点を持ったり、自分の取組を振り返ったりすることができた。たてわり掃除やなかまタイムなど他学年と関わる場も設定した。 ◎自己肯定感が高まり、自信をもつことにつながっている。また、思いやりをもって他者と関わろうとする児童の姿が増えている。	４	４	４	児童の発達段階や学級実態に応じたアプローチの仕方をグループで考え、PDCA サイクルで取り組むことで、児童の自己肯定感を高めることができた。今後は周りの人の良さに気づき、認められる児童の育成を目指し、良いことが広がっていくように取り組んでいきたい。また、今年度の効果的だった取組（なかまタイム、研修、生徒指導通信の発行など）を継続しつつ、来年度も教職員が児童理解を深め、実践、悩みを相談できる研修や場を模索していく。
			継続	自分の心身を大切にし、健康の保持・増進に向けて行動することができる児童を育成する。	年間を通して体力の向上や運動の楽しさを感じられる取組を行う。ミニ保健やランチルーム給食を通して、児童の実態に応じた保健指導・食に関する指導を行う。	体力・健康に関するアンケート（運動・保健・食に関する指導の観点）から健康の保持・増進に向けた行動ができているという児童をどの項目においても85%以上にする。	□アンケート項目に肯定的に答える児童は運動85.4%保健 87.4％食87.2%であった。養護教諭と栄養教諭のT.T.で歯科について食育と絡めて効果的な指導を行った。教職員向けの食育通信等を発行したり、給食委員が食に関するクイズを出題したりするなど児童の食に関する関心・意欲を高めた。	４	４	体育委員会で運動遊びの推奨をするとともに、環境整備を行う。 保健委員会を活用し、感染症の流行時期に備えて清潔な環境についての指導を行う。 栄養教諭や給食技術員の巡回、給食指導を継続し、教職員の給食指導の意識も高めていく。	□アンケート項目に肯定的に答える児童は運動 83.2%保健86.3%食 90.6%であった。大縄大会やしっぽ取り鬼ごっこなど、全校を巻き込み、自分たちの成長や運動への関心を高めるイベントを企画した。 保健委員会がリーダーとなり、感染症やけがの予防について自発的に児童朝会や放送で呼びかけを行った。 ランチルーム給食だけでなく、ミニ保健でも総合的な健康面を配慮した指導が効果的だった。 ◎児童の実態に応じた取組を継続することで、健康の保持・増進に向けて行動できる児童の育成につながった。	４	４	４	運動が苦手な児童も運動の楽しさに気づき、運動習慣を身につけていけるよう、たてわり班等で外遊び推奨日を設定する。規則正しい生活を送るために、引き続きミニ保健で児童に呼びかけるとともに、保健だより等で保護者啓発も行っていく。旬の食べ物や地場産物の良さをランチルーム給食やミニ保健を通して、児童に指導していく。

４	教職員の資質・能力の向上	★	新規	児童が自己の変容を自覚できる授業を創造する。	教職員が、「自己の変容を自覚できる授業づくり」に取り組むヒントを得られる研究授業や職員研修を計画、実施する。	学期末に、教職員アンケート「前回の研究授業で得た学びを基に、どのような取組をしましたか。」を実施し、意欲的に取り組む割合を、90%以上にする。	□肯定的割合は100%であった。教職員が具体的に自己の変容を自覚できる授業改善につながる研修を仕組むことができている。また外部講師を招くことで「自己の変容」に焦点を当てて研修することができている。	４	４	教職員の取組が、自己の変容を自覚できる授業づくりにつながるよう、今後も自分の取組の形成的評価ができる研修を設定していく。	□肯定的割合は100%であった。 上半期と同様に教職員の主体的な授業改善につながる研修を仕組むことができている。また、チームで授業づくりを行うことで、教職員の意識も高まった。 週に１回程度、教材研究の時間を設け、授業づくりに充てる時間を確保した。 ◎自律を促す授業づくりに向けて、全職員で取り組むことで、児童が自己の変容を自覚できる授業を創造することができた。また、教職員の資質・能力の向上につながった。	４	４	４	引き続き教職員の主体的な授業改善につながる研修を仕組む。また、週に１回の教材研究だけでなく、日常的に授業を見合い、話し合える場を増やすなど、内容を充実させていく。
４	地域に貢献する学校		継続	持続可能な社会について探究し、地域に還元できる児童を育成する （SDGｓ・CS）	生活科の学習や総合的な学習の時間に、地域に根づいた持続可能な社会づくりについて学び、実践をする。	児童アンケート「持続可能な地域社会づくりのために自分達ができる事に取り組んでいる」に対する肯定的割合を 80％以上にする。	□肯定的割合は82.1%であった。生活科や総合的な学習の時間で、「地域とのつながり」を意識したカリキュラムを編成した。 児童が地域のよさや課題を発見し、地域の方に協力をあおぎながら実践していった。	４	４	計画している内容を実践し、振り返る。その際に、地域貢献につなげることを意識できるようファシリテートしていく。	□肯定的割合は85.6%であった。取り組んでいる内容を、他学年や学校全体、地域に発信した。また、地域にある施設や店舗等で職業体験を行ったり、交流館と連携して、ごみ拾いやフードドライブに取り組んだりした。 ◎持続可能な社会づくりに向けて、自分たちで計画し、行動に移すことができ、探究的に学習に取り組むことができた。また、地域に還元できる児童が増えてきた。	４	４	４	引き続き地域に根づいた持続可能な社会づくりについて考え、実践していく。また、学年間で既習事項を積み上げられるようにカリキュラムマップをより詳細に設定し、どの教職員が担当しても探究的な学びが充実するようにしていく。

［プロセス評価の評価基準］

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く，状況の変化，問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず，状況の変化，問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

［達成評価の評価基準］

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し，十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し，望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し，一定の成果をあげた。
2	目標を下回り，成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り，成果が認められなかった。

［総合評価の評価基準］

評点	評価基準	
5	１００％以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	８０％以上１００％未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	６０％以上８０％未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	４０％以上６０％未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	４０％未満の達成度	目標を達成できなかった。